

# 自然妊娠妊婦の不安と自己受容性及び対児感情などの縦断的研究 —妊娠初期～産後6ヶ月—

西脇美春<sup>1)</sup>, 神林玲子<sup>1)</sup>, 笹伊久美子<sup>2)</sup>

核家族化や少子社会の進行にともない弟妹に対する母親の育児のモデル(役割)を学習する機会がなく, 母性性を育成させる体験がないまま母親になる女性が多く問題がある。このような女性が妊娠し, 出産や育児をしていく過程で心身の変化や初めての役割に戸惑い, 不安が高まり自己受容性や対児感情が低下し母性性の成熟が遅れることが考えられる。そこで, その変化や関係を明らかにすることを目的に調査をした。自然に妊娠した妊婦45名を対象に, 妊娠初期・中期・末期と産後1週・3ヶ月・6ヶ月の進行(6時点)にともなう不安や自己受容性及び対児感情更に妊娠に対する受け止めの変化と関係を調査した。結果: 不安は妊娠初期が最も高く妊娠中期以降は初期より有意に低下した。自己受容性の, 自己信頼と対児感情は妊娠初期より産後の3時期ともに有意に上昇した。妊娠や育児期にある現状に対する受け止めは, 調査対象者は妊娠初期より産後6ヶ月に有意に上昇したが家族は妊娠初期より産後6ヶ月に有意に低下した。特性・状態不安は相関を示し不安と自己受容性は負の相関を示した。

キーワード: 自然妊娠妊産婦, 不安, 自己受容性, 対児感情, 妊娠・育児の受け止め

## 1 はじめに

核家族化あるいは, 少子社会の進行しているなかで, 弟妹に対する母親の育児のモデル(役割)を学習する機会を持たない女性が多く, 母性性を育成させる体験がないまま母親になる傾向にある。

このような女性が妊娠し, 出産や育児をしていく過程で心身の変化やアンビバレントな感情に作用され, また初めての体験に戸惑い不安を抱えていることが考えられる。

妊婦・褥婦の不安の変化についての横断的調査<sup>2), 4)-5), 9)</sup>はあるが, 縦断的研究<sup>7), 13), 16)</sup>は少なく時期の設定が不一致なため知見にばらつきがある。

母親になっていく過程である妊娠初期・中期・末期と産後1週・3ヶ月・6ヶ月の進行にともない不安の変化があると言われているが明らかではない。

そこで, 不安の変化と不安により影響されると考えられる自己受容性及び対児感情の変化やそれぞれの関係を明らかにすることにより, 妊娠期や育児期を健やかに経過し, 母性性を高めるための基礎的知見を得ることを目的に本研究にとりくんだ。

そこで, 以下のような仮説にもとづき調査を行った。  
A; マイナートラブルのある妊娠初期と末期あるいは産後1週は育児への不適応から不安が高く, マイナートラブルが低下し, 異常の発生が少ない妊娠中期や育児に慣れる産後3ヵ月・6ヶ月には減少する。

B; 不安の高い妊娠初期と末期, 産後1週には自己受容性は低く, 不安の低い妊娠中期や育児に慣れる産後3ヵ月・6ヶ月には自己受容性は高まる。

C; 不安が高く自己受容性が低い妊娠初期と末期, 産後1週には対児感情は低下し, 不安が低く自己受容性の高い妊娠中期や育児に慣れる産後3ヵ月6ヶ月には対児感情は高まる。

上記仮説にもとづく検証の結果, 若干の知見が得られたので報告する。

尚, 本研究は, 科学研究費(平成11年度11672367)にもとづく研究の一部である。

## 2 研究方法

Y医科大学医学部付属病院産婦人科において, 健康審査を受けている自然に妊娠した女性45名を対象に平成11年4月から13年12月まで調査した。

調査の時期は妊娠初期(妊娠16週未満)・中期(妊娠16週から27週)・末期(妊娠28週以降), 産後1週・3ヶ月・6ヶ月の6時点を縦断的に質問紙調査により妊婦の不安, 自己受容性及び対児感情の測定を行った。

Y医科大学の倫理規定にもとづき, 目的を説明し承諾を得た妊婦を対象に行った。

不安は, 不安になりやすい性格傾向と, ある状況下における不安の程度を測定するためにSpielberger et al.(水口らの翻訳)の不安尺度the State-Trait Anxiety Inventory(以下STAIとする)日本語版<sup>6)</sup>を用いた。

自己受容性は, 自己の身体的側面, 能力的側面, 性格などの諸側面をあるがままに受け入れることと定義されている宮沢秀次<sup>15)</sup>の自己受容測定スケール(Self Acceptance)を用いた。対児感情の測定に関しては, 花沢成一<sup>12)</sup>の赤ちゃんイメージ評定表を用いた。

妊婦自身や妊婦からみた家族の妊娠に対する肯定的受け止めは自作の調査票を用いた。

1) 山梨医科大学医学部看護学科

2) 福島県立医科大学看護学部

### 3 結果及び考察

調査対象者の背景は、表1に示したように結婚年齢は22~35歳で平均は27.4(±3.1)歳であり、調査時点の平均年齢は32.3(±3.9)歳である。夫の平均年齢は34.3(±3.7)歳であった。

結婚年齢の平均は全国平均より高く、夫と妻の年齢差は平均して2歳で夫婦年齢差の全国平均値に近似していた。初経年齢の平均は12.2(±1.4)歳であり全国平均とほぼ同じである。

妊娠しなかった平均期間は結婚後1.6年であり、最小値は1年で最大値は5年であった。妊娠経験は1.1(2%)回、流産経験は経験0.46(1%)回であった。

児を希望した時期は、結婚後1.4年目であり、有職者は平均4.4(10%)名であった。

STAIによる妊娠初期・中期・末期、産後1週・3ヶ月・6ヶ月の不安の変化は図1と表2-1・2に示した。

状態不安得点も特性不安得点も6時点のうち妊娠初期が最も高く(43.3±9.0, 43.6±6.4)、妊娠中期(40.7±8.04, 41.2±8.1)以降は有意(p<.01, p<.05)に低下した。一般女性の状態不安の標準値レベルは31~41であ

り、特性不安得点が34~44であることから、妊娠中期以降の状態不安得点は不安としては標準であり、特性不安得点はいずれの時期も標準のレベルであった。

各時期間の状態不安得点と特性不安得点の有意差を表2-1と表2-2に示した。状態不安は妊娠中期や妊娠末期より産後1週と6ヶ月に有意な低下がみられた。

本研究とは時期の設定に多少のずれはあるが、妊娠期・産褥期・育児期を5群に区分し横断的調査した松岡等<sup>13)</sup>の報告によれば、5群間に有意差は認められなかったが、5群における状態不安得点の平均値は、日本版STAIのマニュアルに示された一般女性の得点より有意に高かったと報告しており、本研究と異なる結果であった。また、田代他<sup>9)</sup>によれば不安は妊娠中期に最も高く本研究と異なる結果であった。

しかし、本研究を支持する研究としては松本他<sup>14)</sup>や新道他<sup>8)</sup>によれば妊娠の初期には否定的感情が高まること、生きがいや趣味などの制約、さらにボディイメージの変化することから喪失体験をすると述べている。

また、カプランによれば妊娠中における心理的領域のダイナミクスについて妊娠初期は内分泌環境の変化が著しい時期、妊娠中期は内分泌環境に適應する時期、妊娠末期は腹部増大が著明であり、分娩を予期する時期と述べている。

さらに、岸本他<sup>1)</sup>によれば妊娠初期には流産への懸念が不安をもたらすと報告している。

以上の報告から、本研究において6時点のうち妊娠初期に最も不安得点が高かったことは、妊娠初期は前記のような身体的、心理的要因により不安が上昇したと考えられる。

本研究では、産後の経過に沿って不安は有意に下降し、松本他<sup>14)</sup>新道他<sup>8)</sup>等の考えと一致している。

状態不安得点と特性不安得点間の相関は、表3に示したように妊娠初期から産後6ヶ月まで全ての時期において有意な相関を示した。

田代他<sup>9)</sup>の妊娠全期間の状態不安得点と特性不安得点

項目	対象の背景		n=45 範囲
	平均	SD・%	
本人の年齢	31.1	5.1	18~42
結婚年齢	27.8	4.4	18~42
初経年齢	12.2	1.2	10~15
夫の年齢	33.7	5.9	22~45
児を希望した時期	1.4		1~4
妊娠しない期間	1.6		1~5
妊娠経験	1.1	2%	0~2
分娩経験	0.77	4%	0~2
妊娠中の異常	1.97	4%	0~6
入院経験	0.6	1%	0~2
流産経験	0.42	1%	0~2
有職者	4.4	10%	1~6

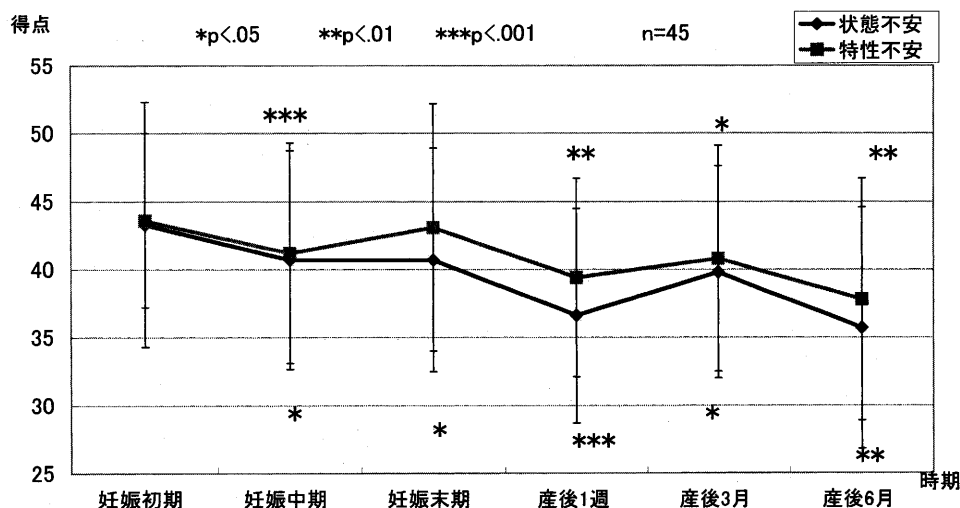


図1 状態・特性不安の妊娠初期と各時期の比較

表2-1 不安・自己理解・対児感情の各時期間の有意差 n=45

項目/時期	妊娠中期	妊娠末期	産後1週	産後3月	産後6月	妊娠末期	産後1週	産後3月	産後6月
状態不安	.019*	0.06	.001***	.041*	.001**	0.061	0.016*		0.037*
特性不安	.0001***		.002**	.039*	.001**	妊			
自己理解	0.068				0.054		0.011*		0.002**
自己承認							0.073	0.097	
自己価値				0.071			0.095	0.003**	
自己信頼			.024*	.01**	.024*	娠	0.014*	0.002**	0.021*
接近得点	0.087		.003**	.001**	.001**		0.046*	0.004**	0.001**
育児動機	0.056		.022*	.001**	.003**		0.021*	0.001**	0.001**
回避得点		.012*					0.017*	0.04*	0.02*
本人反応	初				.012*	中	0.087	0.016*	0.025*
夫の反応				0.08	.005**		0.07	0.02*	0.001**
夫両親反				0.064	.044*				0.059
両親反応					0.082				0.046*
医師反応	期	0.096			.001**	期	0.001**	0.001**	0.001**
助看反応			.001**	.001**	.03*		0.002**	0.049*	0.003**

\*p<.05 \*\*p<.01

表2-2 不安・自己理解・対児感情の各時期間の有意差 n=45

項目/時期	産後1週	産後3月	産後6月	産後3月	産後6月	産後6月
状態不安	0.021*		0.001**		0.018*	0.007**
特性不安	0.005**	0.046*	0.001**	産		0.038*
自己理解	0.058		0.021*			
自己承認	0.084				0.046*	
自己価値	0.057	0.018*				
自己信頼		0.066		後		後
接近得点	0.016*	0.007**	0.001**		0.079	
育児動機	0.015*	0.001**	0.001**		0.012*	
回避得点	0.014*	0.021*	0.001**			
本人反応	末	0.024*	0.061	0.028*	1	0.048*
夫の反応			0.078	0.019*		0.059
夫両親反		0.029*				0.008**
両親反応						0.008**
医師反応	期	0.001**	0.001**	0.001**	週	0.044*
助看反応		0.001**				0.015*
						0.001**
						0.02*

\*p<.05 \*\*p<.01

間の相関は正の相関であったという調査と同じ結果であり、特性不安が高い人は状態不安が高まる傾向にあることを示唆している。

健康成人女性の状態不安の高不安得点平均は42であり特性不安得点の平均は45であることから、本研究の状態不安は43.3とやや高く、特性不安の本研究結果は標準値より低値であった。

西脇他<sup>11)</sup>が調査した不妊治療後に妊娠した女性の不安得点の高い時期は、本研究と同じく妊娠初期であり、状態不安平均は45.5であり特性不安得点の平均は44で今回の自然に妊娠した妊婦より高値であった。

昆野他<sup>3)</sup>の退院後1週間の褥婦に対する調査では、不安得点は状態不安が41.1、特性不安が42.4と標準値内であったが、本研究では状態不安36.6(±7.9)、特性不安39.4(±7.3)と昆野よりは低値で標準値内であった。

自己受容性の各項目の変化については、図2に示したように自己理解は妊娠初期に比較し産後6ヶ月に有意(p<.05)に上昇し、自己信頼は産後1週・3ヶ月・6ヶ月には妊娠初期より有意(p<.05, p<.01)に上昇した。

宮沢<sup>15)</sup>によれば、「自己信頼は現在および将来の自己

の可能性を信頼し、人生や物事に対する対処能力に自信を持つこと」と定義しているように、産後には母親としての実感や責任、さらに母親役割などに対する自信が促進したことにより対処能力も成熟し、産後に自己信頼が上昇したものと見える。

産褥3日以降に一過性の軽い抑鬱状態であるマタニティ・ブルーに陥る褥婦が10~30%いると言われるが今回の調査対象者にはそのような対象がいなかったことが推測される。

自己受容性の一般女性の平均得点は、宮沢<sup>15)</sup>によれば、自己理解23.9、自己承認16.0、自己価値19.0、自己信頼17.7であり、いずれの時期も本研究の対象者のほうが高得点であることから、妊娠や育児をとうして自己の母性としての身体的側面や能力的側面が発達したことによるものと考えられる。

表3に示したように自己受容性4項目相互の相関は、自己承認の一時期を除き6時点全てにおいて中程度から強い相関(p<.05, p<.01)があり、自己受容性の各項目は関係性が高いことが分かった。

妊娠末期には、状態不安と自己受容性4項目との相関

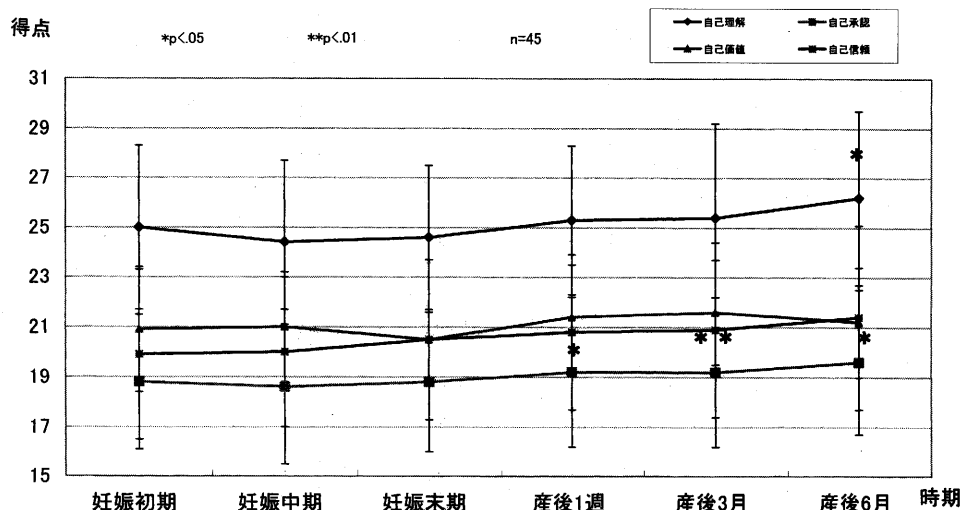


図2 自己受容の妊娠初期と各時期の比較

が有意 ( $p<.05$ ) に負の相関を示し、不安の上昇傾向に対して自己受容性が低下したことを現している (図1, 2, 表3)。

産後6ヶ月には、状態不安と自己受容性4項目のうち自己価値以外は有意な負の相関を示し、不安が低下したことにより自己理解、自己承認、自己信頼が上昇した (図1, 2, 表3) と考える。

特性不安と自己信頼は6時点全ての時期で有意に負の相関を示し、自己理解は妊娠末期から産後6ヶ月の4時点で、自己承認については産後3・6ヶ月以外で有意に負の相関を示した (図1, 2, 表3)。

妊娠初期には、マイナートラブルや切迫流産の発症をまねきやすく、そのことが不安を高め自己受容性を低下させ、妊娠の安定期である妊娠中期には不安が低下し、自己受容が高まるという仮説が実証された。

産後6ヶ月になれば、育児にも慣れ不安は解消され母親としての自己を受容できたものと考えられる。

自己受容性を高めることは自己を肯定的にとらえ、母親になる自信につながることを示唆され、不安を軽減するような援助の必要性がわかった。

神林他<sup>3)</sup>の看護学生を対象とした調査では、本研究と同じように不安と自己受容性は負の相関であったことから、不安と自己受容性は負の相関であることが一般的であると言える。

接近得点と回避得点および育児動機については、図3と表3に示した。

接近得点も育児動機も、図3のように妊娠初期の平均得点は31.4 (±7.2)・33.3 (±8.1) であり産後1週の平均得点は33.7 (±6.5)・35.3 (±7.4) であり、さらに産後3ヶ月は34.9 (±6.9)・36.6 (±7.4)、産後6ヶ月は35.5 (±6.9)、36.9 (±7.5) と産後の3時点で妊娠初期に比較し、平均値が有意 ( $p<.01$ ,  $p<.05$ ) に上昇した。

接近得点と育児動機が産後1週から6ヶ月にかけて上

昇に向けて変動していることから、育児を通して児への愛着が高まり児に近づきたい、あるいは育てたいという感情が高まり母性性が発達したものと考えられる。

妊娠期の対児感情については、花沢<sup>12)</sup>によれば、接近得点は妊娠初期31.6に比較し妊娠中期29.2と末期30.3に有意に下降したと報告しているが、本研究では妊娠初期に比較し中期は有意に上昇傾向にあったが妊娠末期には有意な変化はみられなかった。

花沢<sup>12)</sup>によれば、育児動機は妊娠期を通して向上的に変動することを予想していたが、妊娠初期30.5から中期31.8、末期30.9であり、有意差はみられず妊娠期間中は顕著な変動を示さないと述べており、本研究と同じ結果であった。

回避得点については、本研究では妊娠初期に比較し妊娠中期と末期に有意に上昇したが花沢<sup>12)</sup>は有意な変化はみられなかった。

接近得点と育児動機は、調査6時点全ての時期において強い相関を示し (表3)、接近得点と育児動機は同時に発達していくことが示唆された。

接近得点と育児動機は不安や自己受容性との相関はみられず関係性はみられなかった。

妊娠や育児期にある現状を肯定的に受け止めているか否かについては以下のものであった (表3)。

対象者自身の受け止めは、妊娠初期に比較し徐々に上昇傾向を示し産後6ヶ月のみ有意に上昇し、夫や両親は妊娠初期に比較し産後6ヶ月は有意に低下した (図4)。

本人自身は、産後6ヶ月には母親として育児をしている現状を肯定的に受け止めていたが、対象者からみた夫や夫の両親は肯定的に認める意識が低下したと考えていたことが伺える。

医師の場合にも、夫や夫の両親と同じように肯定的に認める意識が低下したと対象者は受け止めていた。

対象者の意識では、助産婦・看護婦については産後1週に肯定的受け止めが有意 ( $p<.01$ ) に上昇しており、

表 3 各時期の不安・自己受容性・胎児感情・反応の相関 n=45

							(r)
項目	状態不安	特性不安	自己理解	自己承認	自己価値	接近得点	
妊娠初期	特性不安	.589**					
	自己理解	-0.261					
	自己承認		**-.537	.516**			
	自己価値		-0.296	.582**	.545*		
	自己信頼		**-.474	.555**	.494**	.458**	
	育児動機					.907**	
妊娠中期	本人反応	*-.327					
	特性不安	.655**					
	自己承認	-0.232	**-.53	*.349			
	自己価値	-0.274	*-.329	**-.65	**-.523		
	自己信頼	*-.34	**-.442	**-.462	*.363	**-.454	
	育児動機					**-.862	
妊娠末期	本人反応	-0.278					
	特性不安	**-.778					
	自己理解	**-.407	**-.519				
	自己承認	**-.491	**-.548	.344*			
	自己価値	*-.305		.312*			
	自己信頼	**-.519	**-.642	**-.625	.321*		
産褥1週	育児動機					.901**	
	本人反応	*-.344					
	特性不安	.432**					
	自己理解		**-.455				
	自己承認			.321*			
	自己価値			.611**	.509**		
産褥3月	自己信頼		*-.319	.659**		.347*	
	育児動機					.827**	
	本人反応						
	特性不安	.655**					
	自己理解		*-.301				
	自己価値			.39*			
産褥6月	自己信頼		**-.474	.34*		.331*	
	育児動機					.823**	
	本人反応						
	特性不安	.848*					
	自己理解	*-.336	**-.368				
	自己承認	**-.511	**-.424	.277*			
産褥6月	自己価値			.548**	.49**		
	自己信頼	**-.521	**-.641	.512**	.436**	.554*	
	接近得点	**-.348	*-.332	.277*			
	育児動機					.875**	
	本人反応	*-.309					

\*p<.05      \*\*p<.01

産後3ヶ月・6ヶ月は有意に低下し、このことは産後1週には助産婦・看護婦による保健指導を中心とした援助が多くなっていたことを現していると考えられる。

対象者の妊娠に対する肯定的受け止めと状態不安の相関は、妊娠初期と末期、産後6ヶ月には有意 (p<.05) に負の相関が認められた (表3)。

この結果は、状態不安の高い妊娠初期と末期には肯定的思いが低下し、産後6ヶ月に状態不安が低下したこと

により肯定的な受け止めが上昇したものと考えられる。

妊娠や育児期にある現状に対する肯定的な受け止めと自己受容性4項目ともいずれの時期にも相関はみられなかった。

本研究において産後6ヶ月に不安が低下し、自己信頼や自己理解が上昇し、接近得点や育児動機が高まり、育児期の現状への肯定的受け止めが上昇した結果は、池田他<sup>1)</sup>の調査で産後3ヶ月以降には「育児の負担感」や

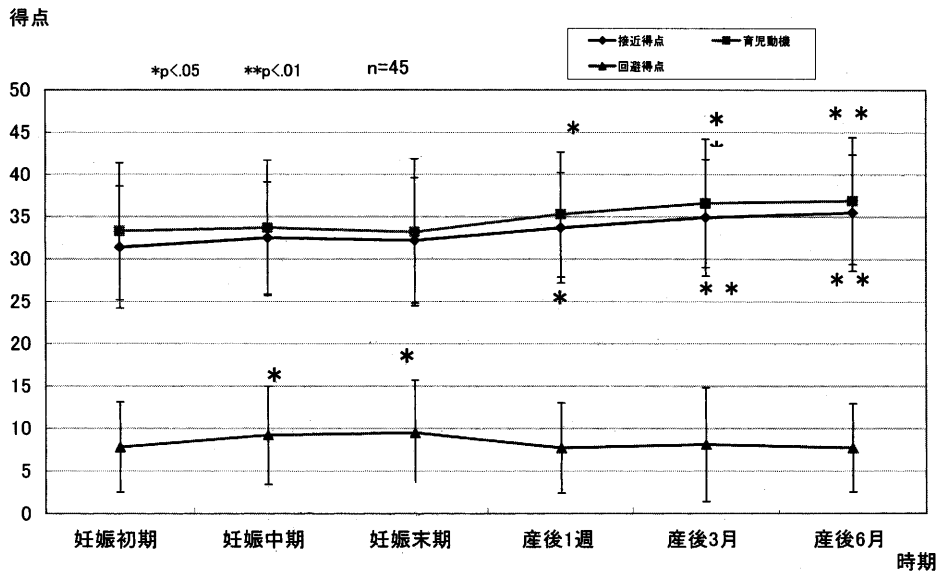


図3 対児感情の妊娠初期と各時期の比較

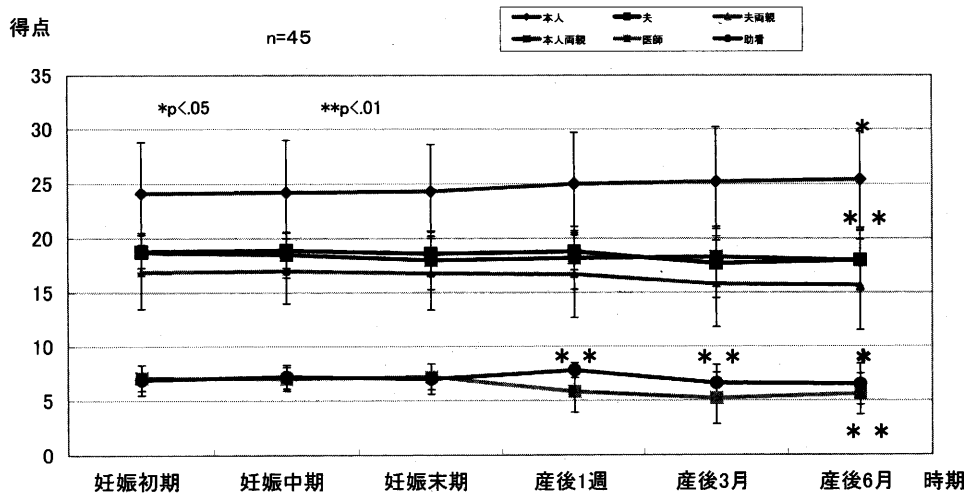


図4 本人・家族などの妊娠に対する受け止め

「自らの体や気持ちを休められない」という気持ちから開放されたと言う調査からもうなずける結果であった。

結論

- 1 状態・特性不安の相関は強く、いずれも妊娠初期に比較し妊娠中期以降の5時点で低下した。
- 2 自己受容性の得点は6時点全てにおいて、一般女性や看護学生、不妊治療後妊娠した女性より高かった。
- 3 自己受容性のうち自己理解と自己信頼は、妊娠初期に比較し産後6ヶ月に高まった。
- 4 状態・特性不安と自己受容性は負の相関を示した。
- 5 育児動機と接近得点は6時点で強い相関を示し、両者ともに妊娠初期に比較し産後に高まった。
- 7 妊娠に対する肯定的反応は、妊娠初期に比較し対象者は産後6ヶ月に高値を示し、家族と医療者は低値

を示した。また本人の不安とは負の相関を示した。

8 不安と自己受容性の関係は負の相関がみられ仮説が採択されたが、不安や自己受容性と対児感情は相関がみられず仮説と異なる結果であった。

謝辞

調査に協力下さった方々に心から謝意を表すとともに調査に種々配慮下さった山梨医科大学の星和彦教授と杉田節子婦長はじめスタッフの皆様へ感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 1 池田浩子 (2001) 育児負担に関する研究—育児負担感の時期別変化と母親の心理状態との関連— 母性衛生 42, 4 607~614.
- 2) 岩谷澄香, 成瀬悦子, 山川正信, 藤岡千秋 (1999)

- 妊婦の不安と性格の関係 神戸市看護大学短期大学紀要 18 59~1999.
- 3) 神林玲子他 (2000) 母性看護学実習における学生の不安と自己受容性に間する研究 山梨医科大学紀要 17, 80~83.
- 4) 岸本長代, 西本由美, 宮田明美 (1996) 不妊治療後の妊婦の不安の特徴-自然妊娠による妊婦の不安との比較から- 母性衛生 3. 4, 382~390.
- 5) 昆野裕香, 柳原真知子, 神林玲子, 西脇美春 (2002) 退院後1週間以内の褥婦の不安 母性衛生 43. 2 348~356.
- 6) 河野友信, 末松弘行, 新里里春編 (1990) 心身医学のための心理テスト 朝倉書房 22~30.
- 7) 島田真理子, 長岡由紀子, 志村千鶴子, 森明子, 恵美須文江, 高橋弘子, 遠藤優子 (2002) 産後1~3ヵ月における褥婦の抑うつに関する実態調査 248~249.
- 8) 新道幸恵, 和田サヨ子 (1990) 妊婦の喪失体験 母性の心理社会的側面と看護ケア 50~56.
- 9) 田代和子, 大山愛子, 細井美江, 家財留美 (1996) 妊婦の不安の程度と内容 第Ⅲ報-妊娠全期間の妊婦の不安の程度と内容について- 共済医報 45. 4 74~402
- 10) 行田智子, 生方尚江, 杉原一昭, 大原明子, 真下由利子, 星野ひさ子, 安部トメ子 (2001) 妊娠各期における妊婦の体験や感じていること 母性衛生 42. 4 599~606.
- 11) 西脇美春 (2001) 不妊治療中の女性に及ぼすストレス因子の分析 山梨医科大学紀要, 17:48~51.
- 12) 花沢成一 (1998) 母性心理学 医学書院 61~103.
- 13) 松岡治子 他 (2002) 妊娠期・産褥期・育児期の母親の不安について-日本版 STAI を用いた横断的研究- 母性衛生 43. 1 13~17.
- 14) 松本清一 他 (1992) 妊産婦ヘルスケア 文光堂 175~183.
- 15) 宮沢秀次 (1983) 女子中学生における自己受容性の発達の研究, 市頓学園大学・短期大学人文科学研究会 人文科学論文集, 34, 91~109.
- 16) 吉田安子 (2002) 産後1から2気月の女性の出産と育児に対する意識 日本助産学会誌 15. 3 246~247.

### Abstract

#### A Longitudinal Study on Anxiety, Self-acceptance and Image for Baby in Naturally Pregnant Women from Early Pregnancy through 6<sup>th</sup> Month after Birth

NISHIWAKI Miharu, Kanbayashi Reiko and HERAI Kumiko

With the progress of a nuclear family and a society with a fewer children, it seems a severe problem that many women become mothers without studying the childcare model (role) of mothers on brothers and sisters and without having experience of rearing maternity. When those women become pregnant, give birth to a child and make childcare, they probably become bewildered on the changes of body and mind and first role of maternity, inducing increasing anxiety, decreasing self-acceptance and image for baby and retarding the maturation of maternity.

Therefore, this study was undertaken to elucidate the changes and relations of maturation of maternity, anxiety, self-acceptance and image for baby.

We studied changes and relations in the anxiety, self-acceptance, image for baby and acceptance of pregnancy throughout 6 stages of early, middle and late pregnancy, and 1<sup>st</sup> week, 3<sup>rd</sup> month and 6<sup>th</sup> month after birth on the 42 naturally pregnant women. As a result anxiety was highest at early pregnancy and decreased significantly after middle pregnancy. Self-confidence and image for baby out of self-acceptance increased significantly at 3 stages after birth than early pregnancy. Acceptance of pregnancy and childcare increased significantly at 6<sup>th</sup> month after birth than early pregnancy in the women surveyed, but it decreased significantly at 6<sup>th</sup> month after birth than early pregnancy in the family surveyed. Trait and state anxieties showed positive correlation but anxiety and self-acceptance showed negative correlation.

Keywords: Naturally pregnant women and nursing mothers, anxiety, self-acceptance, image for baby, acceptance of pregnancy and childcare.